

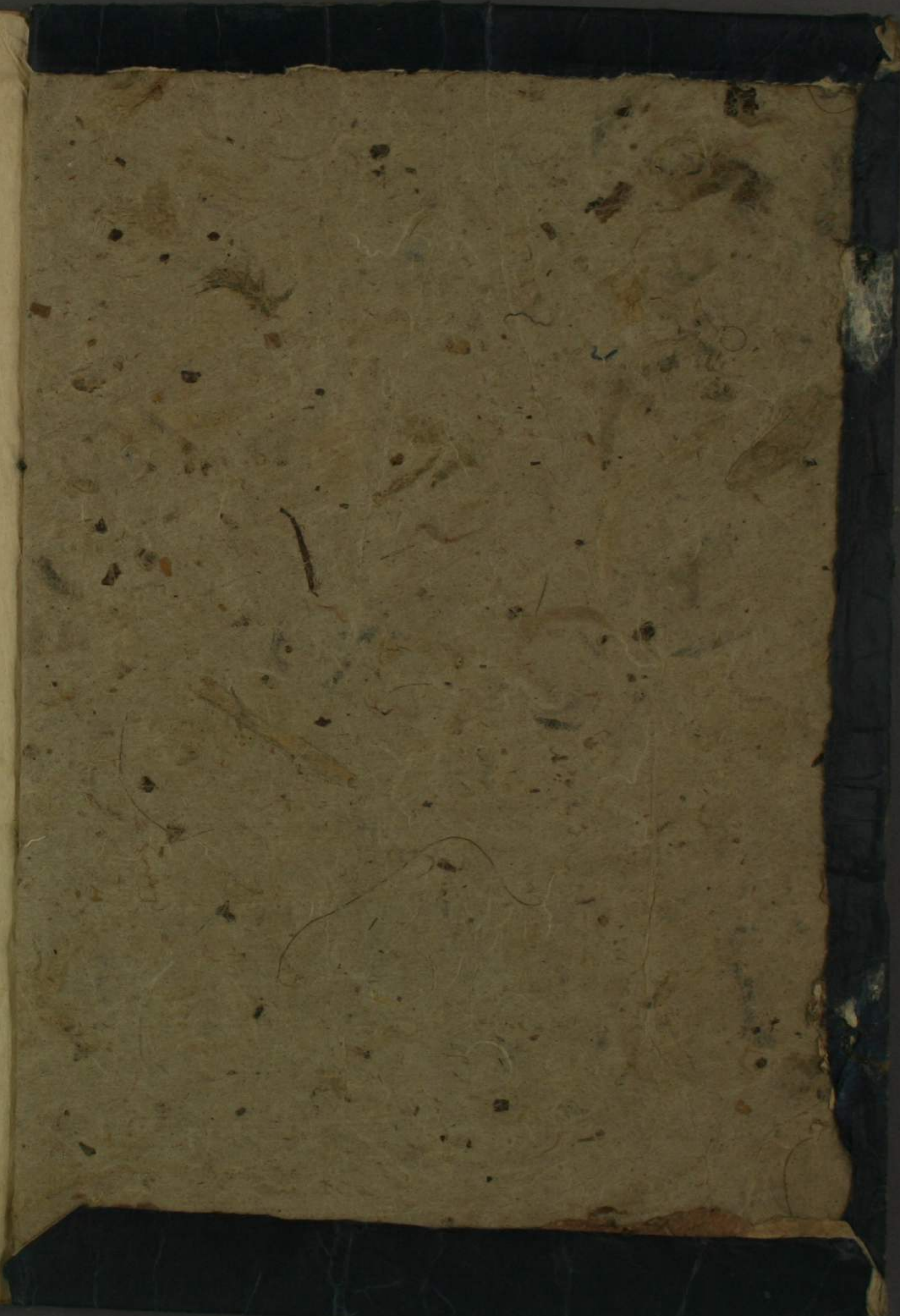
NUDAN Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
LICENSED PRODUCT



1871
S



日本風物紀略
正月之下



1559
2



日本歳時記卷之二

正月之下

十四日 門松 燈籠 綱と云々 今日 恩奉 此 歌よ 大なる 綱と
教人 舟つとひくわさひ引るわうこれと 綱
引と云々

掲すり又 案時記より 立春 日 施釣之 歌 以 彼 他
籠 籠 相 冒 綿 巨 敷 墨 鳴 鼓 幸 之 按 公 輪 子 遊 整
為 載 舟 之 歌 退 勿 釣 之 進 則 強 之 名 曰 釣 強 通 以
釣 為 歌 起 洪 一 れ 綱 引 と 似 たり 事 あり
○ と 和 者 番 あり 白 判 判 金 あり くの 物 也 云々



日本歳時記卷之二

折あまつの菴蓋さくく人のそと人おひかた
とと産の因入り今と産とわづら乃方より取
てろれ折あよ米飯をい今とゆのホーかせ
折あし人りてゆとあおくよりあくと
乞よけさくひのーあよりあうに國さくはさび
くくよに國さくはさび

○西國さくは日産言よりゆはるは
ゆらと折さくはさくはさくはさくはさくは
くめんさくは東國さくはさくはさくはさくは
ゆらと折さくはさくはさくはさくはさくは

礼義よ言さくはさくはさくはさくは

揚するよとらうこ中元日は後とさく杖と結
付く觀玉乃よと扱とく令め礼とさくはこれ
りり一りの風信ありと荆楚記さくはさくは
又荆楚記よとく今州人西月十五日立干糞
掃造令一人執杖打糞堆云の答假痛意者さくは
め礼有事耳これとさくはさくはさくはさくは
そお似さくはさくはさくは

十五日今日とよ元とよと元とよと元とよと元と
松屋連繩等と俗よとさくはさくはさくはさくは

くはあきくやけは火災乃變あり爆竹乃大より
回祿ありしるの凶年をも多し幸れはあまふ
不又の電せむくの電乃下は焼く一風勢なり
つゝの焼も又可なり 爆竹といふ作をたて
くらしむる事あり

我 國は今日爆竹する事定むるありしは
より初より一車よりありしより元日庭前
より爆竹するまの正臘魚尾と稱する事案
内記の力をえたり又陳松をもちりしるされは
五穀のつゆありし爆竹を中一葉深と能なり
よえおの漢乃武帝はたむとありしは 合時あり

花はあつるまであるありと事乃始として
焼のるあり又正月に全夜を焼くと云ふ事
用えき事よりあり天竺より正月十五日僧徒
あつまりて焼とする一伝金村と云ふあり
爆竹乃その日の中はたちやうの僧徒あり
といはるるの漢代明帝の時初く天竺より
そふくは佛法よりある事乃道士乞とやゆ
ひく傳ふよりありしは云ふことんて佛經
と云ふありしは書と存小抄に云ふことん
道安の書に云ふありしはたれ義也なりといひて

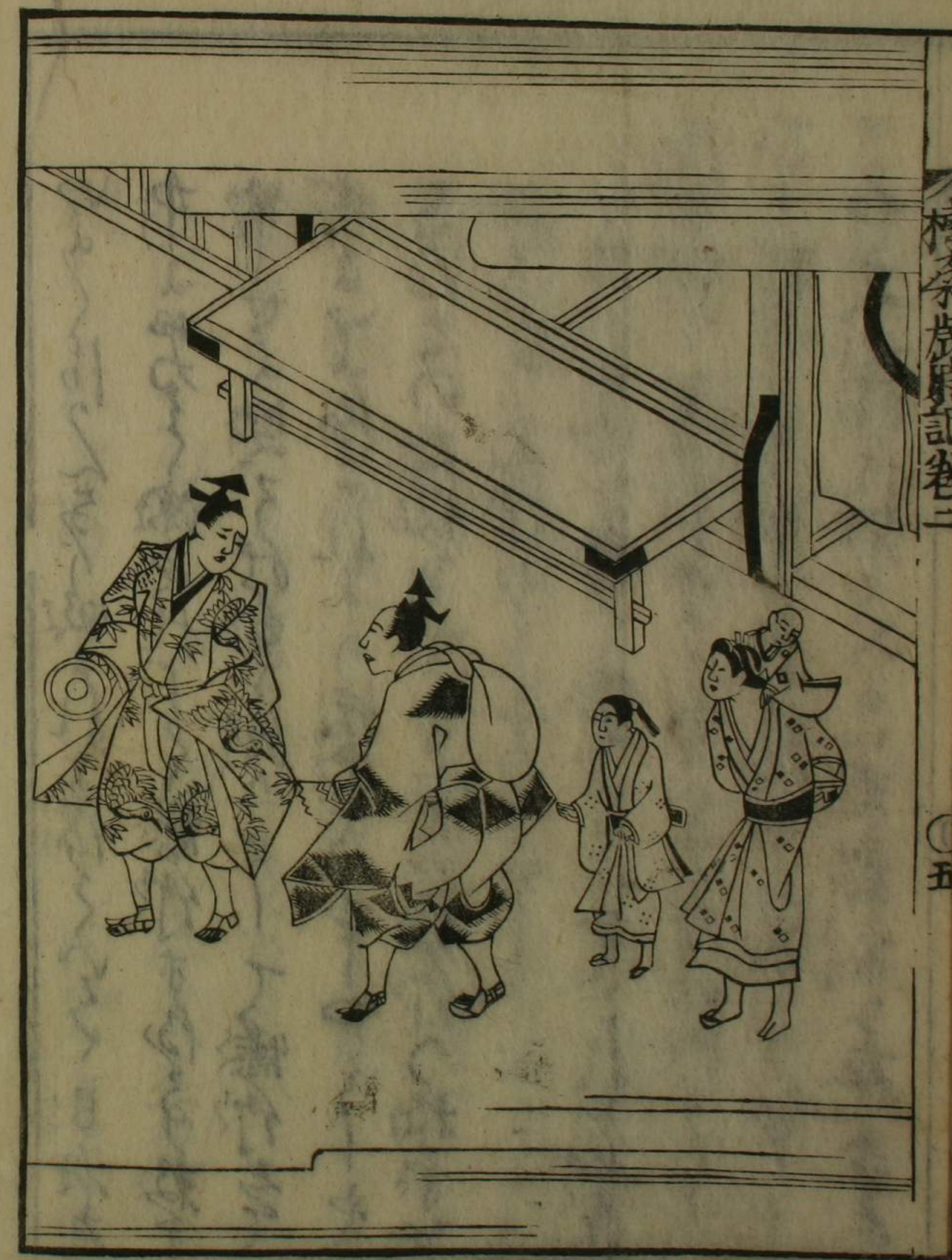
左義也云又西城義也や東也云とちやす
 多部乃候は爆竹と西城佛法義よりて東之
 海布下といふ事ありきとて西の海門のりこ
 とまの事なきは我道と卷るる所なり
 去ればとて乃後を授とて致したるす又注湯
 され候より至且將來と個伏の威儀ありて
 三發杖候奇念の義退治れとてなり
 晴明の蓋蓋内候より人々付れこれ又義施乃
 後るは豈位するはた人々也但ゆらうとて
 降初元日なるは爆竹とてありきとてまひく

我國の今日するも一甚乃始行はる一年
 乃初氣とて一ひ敷せらるるなり一是乃俗
 十二月廿二日爆竹とて一范到候後より
 付連はあれは津松元日のことなりはくも
 わくは一凡爆竹乃あるは流氣に前添せり
 と致敷一初字と卷る一ひらとてなり初字は
 一とて西方海の中有人也尺作人別病意
 契名曰山藤人乃作若史中一燐州有夢る山藤
 候又制子後製は或人乃つとてなり一
 一のあり候て厚くなり細曲凡を祀佛するは

かみすひん乃て先子孫小儀をさうあふ
くれくせきれハ奇食共く為所汚濁人
ありく爆杖と致くろれ所依乃樹と焚気
しり遂に級くや世朱子乃てく是他相死
氣未教被爆杖警教了又焦氏多業よ季吹
後中集と引ていそく爆作妖氣と降車位死
たり鄰人よ仲變といふものあり心鬼乃て又
崇となされて穴窟と用くろり何らび心鬼
志はりよ瓦石と投く妨とふ次豊巫理と
救くこれといのりそれハ却く妖業とふはく

いよく坊らんちり吸これハ獨くいそく日夜者
中よねわく深ねれく爆作すゆり教中
筆よ變ろれと致くて爆作をて
曉よて居これハ妖業乃車やし
あんこの教後といく是ハ爆作乃降車と
降くろり長理あり志あり

○今約小豆粥と煮て饘とす一てこれと今次
漢の細その枕多ふよ十八日ハりらるれせす
ふしかけそし事なる意車のはり初
とわ又七粒丸強といのハ米粟系と稱又草



胡麻子小豆也と延壽式より云ふなり又九條右衛門
 おれ記より白穀すめあつと粟粟柿さげを
 たりしと云ふなり正月より地獄粥防風粥粟稗粥
 年々と云ふ人より云ふ一と云ふいふ事 千金月
 今より云ふなり

世風記より正月十五日小豆粥と云ふと天狗粥と
 かりしと云ふ事と粟と云ふなり(粥と云ふ事
 その粥凝りたるをふじりて毎夜も粥して乞
 と云ふ事と云ふ夜を云ふなりいふ外後者
 祀別歌叔り兵死を云ふと云ふく乃に云ふと云ふ

姑蘇代記よりして信ずるなりたす 玉指を
 一正月十五日膏粥と云ふなり(粥と云ふ事
 と云ふなり又薊菜粥記あり正月十五日
 糜と云ふなりて油膏と云ふなり(粥と云ふ事
 中つと云ふ事なり正月令ふに玉指と云ふ事
 ありといふ事なり信ずるなり(粥と云ふ事)
 ○今日祖考姑乃靈節よと云ふ事と云ふ事
 とすむへー毎月十日の十日の十日の十日
 と云ふ事なりと云ふ事なり(粥と云ふ事)
 ○枕多ふと云ふ事なり十日の十日の十日の十日

一七五九の冬、わりのきり
 家れこころ女中あふれうごむをうたれど
 やしてはねようころとらつひ志るう
 ねうふいぐちてなるあうらうら
 けうけうわりとうらひたるも
 一、あゝ又掖衣束日巻よる年をかりぬ
 中めふいふまゝくまかこむいかに
 ねりまきるの強杖引くつこまう
 まううむむとらうりかたはぬひ
 どりながくかううかめとく銀包つ紐
 粥乃ねあきち古車不難禁中あくと粥杖

少く女房とて、男子とまはしてうた
 遊者まどおいしく、まとなり、女文の志
 まるまゝしりまゝ、今日粥杖とて松枝茶
 中うこぬれ強とて、おまとうじま
 とて、いもまらるるあり、但今の心
 事とちのて、男れ、おまをむ、うて
 後またすも、なりの女と、うのあり、心
 ねれ枝と、あま、いり、て、あ、女と
 西あり、西國、ま、梅、あ、女と、う、
 小、あ、う、今日、婦人、あ、ま、あ、
 出、れ、う

やうりうのりも又思その所可憐とて人
あやまひべうく次

○今秋の一年十二夜乃國月れ始なりあま
く何ん人かと曾れ月れ始なりあま
東坡の妻玉美人は海客あまも妻れ月と
もて何ん人か春月良時め秋月色好月色
令人憔悴喜月色令人和悦といひ一書
趙孟頫の侯鍾禧よりてなりあ載集より上
門院老翁

花れつろよひるをけりるよ妻の夜のことの

月を人々うりきり 新古今集よ太は千里
てりもせひくものもてを妻れ夜のことの
月夜小志くものろるあま

○今夕妻母乃交ととる事と忘れ之喜命と換
すと月令廣義よりてなり

十六日 國信は日遊樂と事とす

み難紀よ奇魯の人多く正月十六日と
新紀小あそぶこれと走る病といふとけりぬ
をるつろよひ日遊樂とるるあま

○又今日至然持つる奴婢の宿居 俗よあやまりく

ごく主人は一日の晩と乞て家より母と父母兄弟
親戚は湯す

扱と家よりお系新紀小執金吾ハ文中乃志の
おゆと楚ずり事と司り友あり唯正月十
五日勅志くお後者一日楚とゆくらこれ
と放夜といやとゆりせしみの國をしかれ
事ゆりといえたり

廿日今日女人乃鏡巻の祝とてうまし休ありし
後鏡と巻食ふ事ありこれ我に鏡乃鏡と
いふとひくく事ありかたをもちゆらあり

ちりといちや初執事と御やけいふゆふこれ
と縁よとまうく候まうひるくのせり

晦日沐浴

○凡執事人功さく一は常ハ月々お内宅中
とましくお掃除するりりきありこれを毎月
晦日に家内室中ありお掃除ぬれだ
す月中掃除をほまたやすくて人功とらふ
ふれつとすくお掃除者より人毎月晦日
乃休として文中と掃除せむとつと
お表式お入りたり

○荆楚宋時記云元日一二月晦小正等並一
 陽と化つて飛つて飲食次女毎とうく或ハ水
 小のうんで富貴守毎月之れ強を賦羽何り
 正月を初年開りてをいつて時俗おも人ト云
 以て蘇とひとつり今乃世民及も年始と親
 戚宴會とるくと蘇と云といふも明の縁うやまれば
 正月世人切りて親戚と宴會す 梅正のうと蘇中
 蘇此蘇の風俗毎年元日後蘇にお送りじり之物蘇にて
 蘇と雲と号して竹生とひとあんとれ我國れ蘇會のころ
 ちうと云とも蘇初と男女とて又親戚乃あつ
 ちうと蘇とて今海一也且正月世上宴會蘇とて

りて蘇初多く正月とひとあんとれと云んく
 はと蘇と晦日と向ふ方一又世人正月多の飲食
 不酔飽とて宴會とて蘇と云く蘇と蘇と云す
 寺ハ二二月天氣和暖乃此多婦花開け小
 蘇と親戚と宴會す一一人乃宴會と收樂
 とは蘇あり古く花樹宴會の法也二三月花
 平けたり一蘇代蘇の章負外也花樹
 乃歌一

今年花似去年好去後人初今年老始知人
 老不如花可憐花自無愁掃盡春光老亦不可

苗列御中史尚書部朔回新恒會客花撲
玉紅春酒香

去りれども親戚すくなき人想ひあひ兄弟を分
むも親密なるをめぐるる有情の徳とて
げ月元日より晦日へ至るまで世俗小歳徳神やま
祭り幸有り厚林門答元元陰陽乃多と用事
徳よありとて一と此有ふ兼徳の方ハ一年の
乃多徳乃方あり皆十干乃徳あり但十干此
間又と陰徳とす甲酉戌庚壬これあり又と陰
徳とて乙丁己辛癸こも有り甲の兼徳を東

宮甲乃方に足酉の兼徳を南宮酉乃方よ
在戊の兼徳を中宮戌乃方よあり庚の兼徳
を西宮庚乃方よあり壬の兼徳ハ水宮壬乃
方よあり乙未平此兼徳ハ陽徳と此有る
を方にあり又乙乃兼徳を西宮庚の方よ在
丁乃兼徳ハ水宮壬乃方よあり己此兼徳ハ東
宮甲の方よあり辛の兼徳を南宮酉の方よ
あり又癸此兼徳を中宮戌乃方よあり乙丁己辛
癸を陰干とす有るおのづから徳あり陽干
よ配合して徳となすこととて己と甲の妻

中しお合ひあり己の兼座の甲に在幸と西
の兼しお合ひあり幸の兼座の西にあり
乙と庚乃書しお合ひあり乙乃兼座の庚に
あり癸と戊書し子あり癸の兼座を戊にお
五緒されお合ひとあり木乃婦とあり庚の
合ふ書せ火の婦といく子れ水と書せ火の婦
と甲の木と書せ合れ婦と西乃火と書せ火の
婦と戊の女と書し先されお合ひとあり各
配合していしくお合ひとあり書れは乙
乃陰陽配合し一毎一年の月乃物と書する酒

あり方なりし一神の名はわこれ陰陽
合れ後ありし一せんや乞と神してまつい
古礼なりし書るる一又陰陽の兼座内傳又
乙年陰陽の兼座内傳のむとあり牛馬天玉
乃書安利兼座のありし一又一乞人か
く書陰陽の兼座あり後あり世倍これれ神
候とありし一陰陽の兼座ありとあり
ありし一ありし一書ありし一ありし一ありし一
ありし一ありし一ありし一ありし一ありし一

又此月及乙月九月中世倍のありし日乃月乃あり

日月乃多とてさるるあり揚らるる月孔大宮伯
 以義宗祀日月星辰を義宗祭日於壇を月於
 地揚氏云春分朝日煇夕月此祭日月之正
 終也賈誼保傅傳云三代之礼天子春朝朝日秋
 暮夕月鄭氏云祭日也壇を月西壇顔氏云朝
 日以朝夕月以暮禮迎喜初出也 日月を祀事一於社也
西典文勢通考ユクリ
 これを天の日月の祭一終事とてさるる又
 朝之人皇女十二代饒孫天皇乃神時天皇を祭の
 以者ふりて神氏の祀春日大明神より二十七
 代乃孫智御魂とて社祭を執命ありて玉璽乃

事とてさるる魚味とてさるる神史とてさるる
 とちとてさるる日待月待乃事とてさるる
 今乃世俗士庶人よとてさるる俗とてさるる終
 とてさるる世神位とてさるる神位とてさるる日
 乃多とてさるる日待月待とてさるる天子にわたり
 て日月とてさるる日待月待乃事とてさるる
 志記より何事とてさるるやびり一尊の大
 史季氏乃天子乃禮樂とてさるる八節して意ふ
 舞せしとてさるる孔子とてさるる聖徳ひて是とて思ふ
 舞くさるる志記より志記より志記より

とんや日月と徹夜乃あまきほとや此終の系
とめ日月をあかざりかろしめ後とあんと
あや神の此終とうけ終る人ぞ福とらる
あしんや王別又天子の玄塔とまつり後信の社獲
とあうたまのぬ祀とあうとせり此やうし
士と二祀と云唐人の一祀と云これぬ祀乃中ふ
て二祀とあうあの一祀とあうよし又二祀
小刀とせり上いれとぬあう事とゆわくと
と備する事とゆわとるをいふあまはあす
天地日月といふるうし原史云地日月といれ

あうとあしあれとるうしあうりあうり
久しとあしあしなそあやまりとぬるは
唐又神道志の終る日終ると天地を神と
あひるあり月終る月終るとあひるあり
と無事神の日の終る月終るの月乃神とあひる
とありありとあし邦乃法とあしひ日月
あせんとあしあうし先体悟奇裁とあし
あしと浄教とあしあしとあし夕は月とあ
あしと一日はあしとあしとあしとあし
あしとあしとあしとあしとあしとあし

おのりの理よあはれき善なるはくしつねに解
具とくも人非位と後くうく次天子にわす
去く日月とあつ事いおうらう人ふ道程あり
凡此終れきとたひ人を福あくしつて思ひりて
福ありとらんや天啓日月と徹後乃家よあつ
とや我日月と久一をきん人よ乃るふあふ福
おのりさあつとあつとみ孫とと保つらるものもろ
天啓神明のありやあなまきんかめつと出んとあ
しつねにわの何くしつてあつておのりて借あ
乃福りさあつとあつとあつと不善よいさつていさる

乃道程さあつとんやとろれはくしつて事あつ
又偽如命世紀よ非とくしつて非よつとあつ道
と法よとくしつてあつとく非は乃息とあつとあ
て非明とあつとあつとあつとあつと非のあつと
佛法とくしつてあつとあつとあつとあつとあつと
非とくしつてあつとあつとあつとあつとあつと
とゆりさるすあつとあつとあつとあつとあつと
乃三綱と佛とあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
とい尼とあつとあつとあつとあつとあつとあつと

つてさういふ又おのせきなりつれ神明はかく
いひまじひはくあるれなきとふらふとま
たうらましく羽とかくとさあふ事かみれごと
あふまよ今日結月結して日神月神とまつり
をかう信と強し経候よりせまきごとく一神の
けりごとくあれごとくあふらふすのりま
まじりあふぬるれつとぬるあふえはるの
を習くあせざりまそのあやまりのあふ人
あふ天地神明のまじりて候よこのあ
ふらまじりまじりまかみ地神のりまじり

む身代まじりひとなる事必結乃程あふ世人
これ程とあふく日結まじりかみ地神のりま
まじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじり
又世信まじりまじりまじりまじりまじり
のまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじり
凡庸申乃凡庸人のまじりまじりまじりまじり

守之の三戸をりびこび庚申とせんが己
尸作す又太平廣記より勢を三屍代姓
宗より人男乃中みわきも宗とよりひ宗
一庚申の日より終りての上帝より作あり
仙とすあぶりのまの三屍と終りてかくれ
なきはとれども宗徳ゆへ一たと感徳編り
とく三尸乃神と云く人乃代乃の中みり
人乃善悪と云く考案く庚申乃日と云上
三尸代乃のわもひ天曹乃のまに上りて此
人よりく乃ぞとたの悪事と知れひると是

おぼくろれ人乃あまらたをれば吾より一紀
十二年乃壽命と云ひひ少木と云一算六十年
乃命と云んばあまもいと神と云の神一と
てこれをとさげるとありかか神と云はれ
んが作すらまたんや積善はたせしむる
有り積不善乃家小の修徳あるを聖人乃教
示く神の理より志るあまも吾善と云りて
庚申の積善と云りてありぬまのを
まぬうはると云ひ人乃善と云ひ
おれが善と云りて飛と云ふは

お取らまき様(ニ)とて去りてのやんや庚
申(ニ)とちし(ニ)の事(ニ)乃(ニ)義(ニ)あ(ニ)ず(ニ)り(ニ)た(ニ)ら(ニ)し(ニ)し(ニ)
ら(ニ)び(ニ)て(ニ)翁(ニ)あ(ニ)り(ニ)て(ニ)今(ニ)世(ニ)の(ニ)俗(ニ)これ(ニ)と
あ(ニ)ら(ニ)し(ニ)と(ニ)儂(ニ)念(ニ)と(ニ)ま(ニ)う(ニ)る(ニ)る(ニ)庚(ニ)申(ニ)と(ニ)あ(ニ)ら(ニ)し(ニ)と(ニ)稱(ニ)と
あ(ニ)り(ニ)乃(ニ)上(ニ)は(ニ)何(ニ)處(ニ)り(ニ)あ(ニ)る(ニ)べ(ニ)し(ニ)又(ニ)忠(ニ)邦(ニ)
あ(ニ)ら(ニ)し(ニ)庚(ニ)申(ニ)ハ(ニ)樽(ニ)田(ニ)彦(ニ)大(ニ)神(ニ)乃(ニ)引(ニ)り(ニ)て(ニ)日(ニ)あ(ニ)ら(ニ)し(ニ)
也(ニ)大(ニ)神(ニ)と(ニ)ま(ニ)つ(ニ)る(ニ)り(ニ)は(ニ)人(ニ)を(ニ)侍(ニ)ま(ニ)さ(ニ)し(ニ)て(ニ)これ(ニ)又
附(ニ)命(ニ)の(ニ)位(ニ)あり(ニ)又(ニ)庚(ニ)申(ニ)を(ニ)金(ニ)なり(ニ)申(ニ)を(ニ)金(ニ)なり(ニ)
金(ニ)と(ニ)金(ニ)と(ニ)刻(ニ)す(ニ)ら(ニ)日(ニ)あ(ニ)ら(ニ)し(ニ)し(ニ)て(ニ)日(ニ)あり(ニ)
し(ニ)や(ニ)ら(ニ)し(ニ)中(ニ)小(ニ)土(ニ)と(ニ)入(ニ)り(ニ)て(ニ)お(ニ)と(ニ)れ(ニ)る(ニ)事(ニ)と(ニ)ら(ニ)し(ニ)り(ニ)

先(ニ)又(ニ)擊(ニ)鼓(ニ)あり(ニ)と(ニ)竹(ニ)の(ニ)お(ニ)刺(ニ)と(ニ)い(ニ)ふ(ニ)申(ニ)
あ(ニ)ら(ニ)し(ニ)や(ニ)ら(ニ)し(ニ)乃(ニ)久(ニ)に(ニ)は(ニ)様(ニ)と(ニ)い(ニ)ふ(ニ)事(ニ)あ(ニ)ら(ニ)し(ニ)
是(ニ)を(ニ)は(ニ)ら(ニ)し(ニ)流(ニ)儀(ニ)と(ニ)い(ニ)ふ(ニ)乃(ニ)此(ニ)終(ニ)妖(ニ)な(ニ)ら(ニ)し(ニ)
る(ニ)事(ニ)と(ニ)ち(ニ)と(ニ)し(ニ)し(ニ)志(ニ)と(ニ)い(ニ)ふ(ニ)可(ニ)なり(ニ)され(ニ)ハ(ニ)柳(ニ)子(ニ)厚(ニ)戸(ニ)
と(ニ)罵(ニ)文(ニ)あり(ニ)是(ニ)淵(ニ)頼(ニ)と(ニ)歌(ニ)傳(ニ)り(ニ)て(ニ)經(ニ)宗(ニ)論(ニ)柳(ニ)
り(ニ)文(ニ)に(ニ)跋(ニ)と(ニ)い(ニ)ふ(ニ)又(ニ)信(ニ)史(ニ)既(ニ)に(ニ)庚(ニ)申(ニ)乃(ニ)會(ニ)々(ニ)
原(ニ)生(ニ)れ(ニ)神(ニ)法(ニ)所(ニ)て(ニ)親(ニ)氏(ニ)を(ニ)は(ニ)ら(ニ)し(ニ)乃(ニ)此(ニ)と(ニ)志(ニ)と(ニ)し(ニ)乃(ニ)
浮(ニ)屠(ニ)と(ニ)い(ニ)ふ(ニ)乃(ニ)代(ニ)姫(ニ)島(ニ)乃(ニ)事(ニ)と(ニ)い(ニ)ふ(ニ)乃(ニ)か(ニ)と(ニ)い(ニ)ふ(ニ)
群(ニ)波(ニ)採(ニ)伐(ニ)乃(ニ)子(ニ)厚(ニ)戸(ニ)文(ニ)と(ニ)淵(ニ)頼(ニ)り(ニ)て(ニ)乃(ニ)り(ニ)て(ニ)信(ニ)史(ニ)
也(ニ)又(ニ)は(ニ)柳(ニ)阿(ニ)り(ニ)と(ニ)い(ニ)ふ(ニ)乃(ニ)は(ニ)誠(ニ)と(ニ)い(ニ)ふ(ニ)乃(ニ)美(ニ)に(ニ)堪(ニ)え(ニ)り(ニ)

許那州の侍人、初共守唐申と云ふに
と、張籍の用居代侍、唯我推甲子、
唐申と云ふ事

申信西又九月とて、三月と拘事、
中義子も、初共守唐申と云ふに、
正又九月とて、唐より、
小とて、佛法、此三月、
足破、信人、今、
而差、
不、
不、
不、

九月、不、上、友、戴、
新、
梅、
て、
月、
と、
傷、
多、
と、
七、

博桑崇祿記卷二

十九

世ふ久しき物傳えあしりゆりも終つた
色棚すり志何りゆきへ磨進史より祖代
年中経進とよその科舉小進せしり及
廿二事と和し遊し解てあすき祖これ
くれと袍帯を飾りて華し廿二ぬ明
或年乃四月元日の在れ多しひん乃小鬼
り虚耗と飾りて玉苗とぬむけし一
て小鬼とそくしてこんとあし明
こまがりつくと四つハ飾り
を七経進をりりつと和し
時袍帯乃華と

解つるの状さめり世世と報せんが
耗り鬼と澤くとり人ほひて身
若くは命とられ像と圖してこれと
は之らましとあしきまの
あしきと経進張次謝助経進表あ
よりお院より事何り久し
お志より経進唐乃明皇代
けしあし物ありあしき
を辟邪干張言の経進家代
経進たが葵と旭と葵同して

本草の経目よ何れ珍うといへる菌類は推極ハ菌類
 也といへる又考工記の注は經葉ハ推乃多あり
 中力ケレる菌推の形不似たり推又菌の形よ
 似たれい否と問す俗は神乃一推と執る鬼と
 うつ圖と畫て寂淨也とらづる事と好むも
 因る淨極の情と能くこれ辨第乃純出とく
 鬼と味ふといふ道又あるとありてそれ
 一し
 推極れる時珍は經とてよく經とすべし
 經史の經のどきいふ便ありゆを氣化

まらま場人や多く書と修せバ書方記不
 どもとらうやむむとあらうれ
 又中朝少くい元と大師とて慈惠傳の傳と書
 ていつたよとつを邪痛とせむまがまひなり
 けり少く俗人乃家とんまらるるあり元皇經
 小並重傳の經傳と前く乃民屋の押ハかの
 傍或時後とて其害とらうして其害とて其
 教傳と重んぶるありと邪魅害弱とて
 けんと又附よ夜と跡とらうとて其害とて
 却らうやうのよみあせを氣化を以て

何くそひ羅一逆とまらび理明らるるべとの
けくろく代志勢とまらる

は月樹木と移栽へ一西日と本とらゆり上時

之古書よりんえり枝と切く地は挿と此月

より又花葉と移栽のまげ月より一と月令

廣義よりんえり一れるる氣とゆき地

生流とらなるや岩政を書よとく元徳若木

と樹るふ下弦乃後上弦の歳す

八日と樹葉の月と移栽の書あり樹とて一

氣盛たり時木の生葉全く枝葉よりりなる

移せばも性とやう移木とれべも木とわら

又つとく元果木とらゆり中先九月乃中此後

樹れまらると移る繩とゆきまらるとかきわり

しりあゝあ肥王と入水と渡へ一次年正月

うらうらゆへ一移栽の時と中分を移して

ちとつとわらとくまらとらやうらなるまら加え

地画より二三可たらくあゝゆりちとまらるに

く垂るる次栽くのら中月やといぬ水に

は月柳乃枝と切て地は挿ハ速く移栽とて月令廣

義よりんえり元は月枝と挿す可なり木の枝

栲栳椶園栲 經屋松海紅海棠山藥花石栲
 山藥 薔薇花栲椶等あり 至法 芝草と日
 もかゝ細糸一砂土と等分にしてあるひて
 よくまぐくちせすだるを地よ志すつちかて
 枝とる年じまのしのぎくようぎ種たねのたれたたきか
 えごあき先オグ完オホとさしてゆくこの元ウチよき
 たる枝とゆあすうとゆか時ときあさうくを
 陰いん地ちより一或あるはよあひひとまぐく日ひとむ
 ありのゆたぐくとれは海うみせごりすすな
 枯かゆゆりて根ね生なしたる時移うつらぬト又物

冬ふゆよ落おち葉はをさざり木きの五月栲か取とり時とき挿さて
 物ものを葉は落おちたる木きを五月ごごの挿さ人ひと一ひと元もとさ一ひと木き実み
 う人ひとをいともゆき生なち一ひと收と貴き利用りようよき何なにも
 養やし子こよ十年じゅうねんの利りを樹じゆと挿さくあはぶとるるよ
 とりりり元もと元もとあ木きと樹じゆと函はこをよとあ一日いちにち園えん
 中ちゆうよ遊あそんでる代しろ生理せいりと挿さ親おん一ひとそら親おんと老おい
 貴きと家けをさ下したとに子この案あんより種たね子こ乃の方かた地ち之の
 生な意い者もの可か親おんといひ親おん地ち親おん法はふ自じ法はふ因いん佳け
 與よ與人ひと同どうくつる方かた地ち表へいをさわつるよと親おん
 て至いた地ち生な物ものの記きとらうとる理りをさ一ひと

歐陽公の種花侍よ

激激紅白宮東閣。先後仍須汝。汝我欲何成。
播酒去。其數一日不花開。

楊煉齋の種花侍よ

三返初開先。蔣卿再用三。返者剛明。傑奇奄有。
三三連。一返花開一返次。

趙白雲の栽仁杏侍よ

白髮移根送。返送何年及。見子垂。老本但欲。
添培植。不問園花結子時。

四月を致生代初あり。ある本とらるる。たき聖なる

果とくひかひのあり。返まらきむ。さくさくあり

むまればら。抽ひまぐり。秋乃ま。とあるひ。すか。これ

い事。腹念よ。乃えたり。吾子の。さく。樹木。いつ。依。雲

禽。秋。以。時。報。吾。子。乃。曰。秋。一。樹。報。一。報。不。以。其

時。此。者。也。これ。吾。義。よ。あり。本。と。さ。り。報。く。さ。り

と。不。時。と。さ。く。世。下。を。不。他。を。ま。い。れ。つ。ら。あ。と

天。地。乃。不。者。あり。と。さ。り。さ。り。あ。なり

牽。金。羅。よ。さ。く。吾。志。乃。月。天。地。資。始。乃。他。也。乃

亦。不。固。密。して。志。動。と。涉。と。さ。り。な。り。き

以。月。狸。肉。と。く。く。ハ。報。と。わ。ぬ。藜。と。く。く。ハ。腎。と。さ。り

生蔥とくろの面と遊風と梨の又梨とくろ
こまうれ又響花不対地と落して飛落
乃動と遊く
月令度義 兼書

凡一年よ七中二候あり又日と一候と一
氣と一候と一月と一候と一候と一候と一
四月より十二月まで毎月各一候と云々と先
四月乃六候才一冬風強凍才之蟄蟲始振才
二魚上冰右立雲乃三候才り才曰糝魚才
又冰厚小才六葉本崩動右氷乃三候才り
凡一日一候漏刻乃較とて百刻百刻ハ漏刻の

肉よ並し方等よよまき也乃較あり
長に走らうりて登秋乃長短ひ
雲かぐさ時を概す
一り一有二十四刻登秋たぐひよ長短ひ
先立雲ハ登四十二刻分秋分十六刻
十分合百刻あり
氷ハ登四十二刻分
秋分十四刻十分あり凡秋分と一刻三分
月令度義
よんてん

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

日本書紀卷之三

二月

節と節と云中と春分と云の二月の月名仲春也月令月節と夾節と云の二月の月名と衣交と云は月節也

朔日 中和節と云

二日 今日と初朔と云や洛陽記に乃之云

○孟予乃生れ給ひ一日あり

孟堂律考より周礼定王二十七年四月二月孟予生れ

今の二月二方あり

○國俗奴婢と云ふ小今日より嘉年二月二日までと

其期より嘉年三月五日より九月方より嘉年

と云て節と云は又後仕代奴婢ハ財と云りて年終久

日本書紀卷之三

三十一

ちく片丸奴婢と取らよ禄乃がきこふの控へ
 す又才頼のそのとあれがらよ好むがらひ
 以て才ある志いふにたすまねなきいたく
 買ひ取らるる者 肥仙のいふく買ひ取らるる者
 必 毎才有りて使
 令んまかれひるもたひ多くの奸曲ありも
 乃古き徳よ上等のるよりくち考れんとつ
 下賤乃その年久しきは之にうすす才なき
 てんあこころたどりてあやまち多きものあり
 約約と一年と定めりその人不好を去年と

八日 釈迦佛乃生日あり 佛祖統記は周北昭王二十
 四年四月八日釈迦佛生とあり但周を子の月とて
 西月ととれば西月の今乃二月は尚まの淳
 事と考とて夏西の四月ともしゆらひ
 十五日 提婆鐘乃今日と也 約といふ
 巨衣競ひ争く何かなればは
 今乃八月廿又秋の氣中なるは月夕
 号して月と貴すりことと
 ○佛家乃今日釈迦入滅の日とて涅槃會とあり

考れしとて又月建と考ゆまはり掃する小破邪
論は周礼穆王五十二年二月十五日佛涅槃す記
せり月の二月は今此十二月ありとるまは今十二月
十五日とて佛涅槃すまはり

十八日孔子乃卒一掃日あり孔子の生卒乃日後徳から
くけて一掃一掃がこ

これハ孔子ち十代乃後
孔子の生卒の後なり

二十九日 比比艾考と田所は掃しめ或は布し
ふへしと己乃草履とてなるあり来地ゆへん
農まも掃する

満日沐浴

考れし日夜の長さひししは河ありき勝とありし
考れし夜何多し日此出まで二分半と曉や
日と考ままで二分半と昏とす昏曉合て中時ハ
夜は属しとて是より明らなること登に於け
られし日夜ひししは河とては夜より日の長
考れし一掃来復して漸湯生しりたなる
ありし考れし日夜ひししは河とては夜より日の長
考れし日夜考れし考れしと考れし一凡人家の中なる
考れし考れし神をまはりし考れし考れし死せる母
とて生れし考れし考れし母より生れし考れし考れし

けし一六た考妣とまつる湯ふハ皆祖より下と
 多り孫子ハ皆祖より下と多る一とつるはよ
 儀とけしすハも息とむくゆハ義あり又母之祖
 母我方の根本あり忘るハ其の甚也又記して
 けしとこれとあふを遠と追れハ也ハ日一年
 又日何ハ何付と忘日あり何付ハ忘ハ仲月
 用由一喜ハ夏ハ秋ハ冬ハ春ハ喜林二何
 まつるも可あり忘日ハ忘日あり一年ハ忘一日也
 和俗これと祥月と又毎月ハ月忘ハ古俗ハ何す
 日本少く中比よりおとれハ我々も厚くハ忘る

素食とハ可あり春秋ハ祭と忘れハ祭ハ何
 一ハ毎戒一平ハ祭と後ハ何とつるハ何
 一と何一日本ハ忘るハ何ハ一ハ蓋蓋邊
 豆ハ穀類と用由一ハ只考妣祖之の目
 たる物と用由一又を忘るハ一ハ何ハ肉
 食と用由一日本少く今ハ魚を忘るハ肉食と
 一ハ何ハ一ハ何ハ一ハ何ハ一ハ何ハ一
 古俗ハ忘るハ人ハ又ハ忘るハ考用ハ何
 一ハ俗と何ハ一ハ何ハ一ハ何ハ一ハ何ハ一
 一ハ何ハ一ハ何ハ一ハ何ハ一ハ何ハ一

一ハ本館を移奠す。朝廷より年々二
 三ハ大寺寮より孔子を奉りて二月と八月乃
 上の丁日かぬひびり日徳園忌初年の事ゆか
 少何これハ中乃丁より但大寺寮より孔子が
 十哲と奉りて法徳園より先聖文宣皇先師教子と
 奉りて奉府より先聖先師関子書をまつり
 延表或は乃よりこれ事文武天皇大元元年二
 月よりちしめられし事
續日本紀 後苑院寛
 元年中より移奠乃終りし事無他乃大
 孔の後世終終しきやいよわむに事おもふ

俗の元重人の上一人より下義民よりなりて
 万世代師を奉りて
秋奠乃礼式終式
はるかに 初初を奉りて終りし事也

春分秋分乃初日より三日より日と始りて
 七日と佛氏より奉りて彼岸より又彼岸乃事也
 を中より奉りて又七日の万世
 儀寺より佛氏より奉りて又佛氏より奉りて
 終りて奉りてこれと彼岸より奉りて
 奉りて奉りて奉りて奉りて奉りて奉りて
 又日出没乃奉りて奉りて奉りて奉りて奉りて

切くたりは後のごくちまばるるに雲花はひり
 事とより志るまのあれちよは時よかひりて強経法
 事あり又依は依くち海に依る時くまうくあるる
 梅丘の如く想よしく成依るなり後子識樹菩薩の記と
 引て如率天乃例は蓋不卷ありうと小梅なり二月
 小記ひくま七百七夜うして落秋八月七日果來摩
 薩昔花梵天帝釋等集して七百乃百世間の善人五
 人乃多と中記と生死彼岸は經盤彼岸あり曰取取七日
 修善業いとのり善梅七百なりと此事たり多を
 ちや砥平石乃録に彼教を日本八風俗あり老至小

志るたりとより志るるにこれた我 國此
 漢唐氏乃る事しわく中華天竺の事なり
 ありく一好古これとよきり修善乃事と書たる天竺
 強記とよ書一卷有りこれ天竺に諸樹菩薩乃他とて
 依るありと依れと依書あり我 國此俗の依り
 てやくしひありしりたるく一又且更強記ありし
 りん代事とよりくちく書りしこれ唐に依る事
 のことなりとより多く佛書と引依れと書るるは
 書よは依るものもとより書らるれ書と依るるは
 り後く一と法日とく春秋に二書を法と書るるなり

土をよく万物と若くはひ又穀と生は故よまろき農
 事れよりんろとめり秋はるれ豊成と種するを
 ともんその日へ立其乃後才又の成れりと豊成と
 立材此後才又の成れりと種種とん
十日の甲戌己丑なり
あまき結そふ成の
 日と月と種記を伸春推元日命民社と有り
元日ハ春日
のよまろ
 風俗通よそそ若五れりと備くよき遊とまれ
 舟車乃ちろそろ足改れまゆりとして種成豊す
 けまろかーあよ記て社種とす左傳よそそ若五
 氏子有り句龍氏とよ平水土あ小記してそ社と
 種記郊特牲不厲心氏乃天下と存る所時不れよと

農しよよも百穀とよの夏代衰るよよと月乃
 棄継之あよ種くして種とす共工氏の九列
 覇方雨そのよと后土とよよと九列と平ぐあよ
 記てよそ社とす
豊邑のろく棄百穀と種種の
櫻の百穀のろありあよ種とよ
 ろの種よろれ社とす社あり櫻ハ穀種あり土穀
 乃種とあろろと人氏と生るあすろ左傳りまろ
 ろよそ秋日あ村民たがひよ春種して酒食
酒の食
 破飽とれろんそろ張演の社白乃種すもあそ種
 以醉人種とれまろ又け日れ酒と種と治む
 あよ酒種酒とまろそ海程種事よそそろろ

葎ついでをせんと社まつ代まつのついでり秋あき社まつのついでり月つき令しん度ど義ぎ乃なりり
まま分ぶんのぶん陽やう氣きのき原げんををくく發はつくく時とき乃なりりりててまま温おんれれ乃なりり
ちちりりああままちち分ぶん乃なりりり乃なりりり後ご乃なりりり法はつ菜さい蔬そ代だい行ぎやうと
乃なりりり一いつ乃なりりりののたたねねとと乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり

櫻おう櫻おう草そう。地ち層そう。莖えい連れん蕤ずい花か葉えつ椒か。木もく綿めん連れん蕤ずい。莖えい百ひやく令しん夏げつ乃なりり
紫むらさき菫すみ。萵るど苣じゆ。甘かん藪じゆ子し。牽あま牛ぎゆう子し。雞けい冠くわん花か。浮う木ぼく紅こう萱せん草そう根こん葉えつ乃なりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり
乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり乃なりりり

博桑農時記卷三

うゆらふまゝなり又そくし月法果本に培へり
 月法果種根と播き收むし沈む中へ種入
 そく古法草葉と播り多く二月八月と月のこれ
 種より種ひ但二月の葉に芽し八月の苗
 根とありさるゝに人少くさるゝに葉上をへ葉
 自附と世の大率根と用り種を宿根りし草葉を
 附さるゝ津澤しるの根と用りて何さるゝこれと
 後人とする草葉種葉とありさるゝ苗に附されば
 實して沈みり苗有り附し人園志く種をりその宿
 根をさるゝとれり苗ありさるゝに種有りさるゝ

へりさるゝ根生ひりさるゝに是てまゝの葉を
 今いさるゝ葉を切りさるゝ附されりすかた根を解に
 種しとありさるゝの根を種く種しこれをも種をり
 葉と用り種ひ葉初く長是さるゝ附さるゝ葉と用り種
 芽乃あり附りさるゝ種と用り種初く種り種り取
 多と用り種ひの葉と種すに取られ種りよ時月
 とひりさるゝ葉土氣より種有り天時懸休あり平地
 二月の種りさるゝの種ひ乃中より種りさるゝ四月も
 ひりさるゝに種を種大株種りよさるゝ人四月
 芽種ありさるゝ種を種用りこれをも種をり

此月日と推く養作と一由宿ある人今二月月
 八月十一月と養して湯守とたきけ御殿とあき
 一二月三月と養骨と七世養して毒氣と使口と
 夏と氣と脚氣初ん乃後ありと毒氣の養書と
 一二月乃方書と危張人張とて年月日付り
 陽て養骨の日あり乞養問難養と古若明醫
 乃とさるるあき流世世者の後をよの作とるに
 ずた、四季の雨と雲のたのぬとあり交の養り
 あり秋と大に流とあり冬に脚にありと之り養書
 問乃とよかれとよしとるる一穢養書英と記り

又四月毎月と推くと二百條程とれは毒氣と
 申書初くとあきと養のり時切と夫婦の事とて
 月令度義と記して
 天守和暖の時部外と推と並款して血氣と解
 暢と一
 朱子乃御儀とて月終と仲夏令令男女とあり又
 那徳地場氏の流と法陽交以成婚終順天時也
 是ハ月と男女嫁娶乃礼を約くと宜し三月あり
 六月と食ハ大に養りて千壹方以て免と食
 下徳と傷る難ととるハ心とやぶる英地菜及麻菰と

三月二日鼠麴汁とみそを密に合せ移し和す
 名付て熟舌料音振米とよみこれと食とせし厭討
 氣とるるやう又あまの鼠麴酒中山濃津鹿屋
 膳手去熱軟雜米粉合甜美ありとありこれにて
 刃重りもろくし鼠麴徳を用りて之をとり又
 文徳家縁才一考よ田舎よま有り候よ母よ考を
 名づく二月は始々生ひ草を煮てて之を煮し二月
 ころよ婦女これとみそ蒸し揚ぐ候と傳
 えさる草を煮しとみそとありとれは我 國中一六
 鼠麴徳を用ひし刃とありし乃比より鼠麴と

用ひしにて艾と用ひたりしとよ又綿繻豆粉を
 小のりよ周乃出王れ時或人草餅を津うて出
 王よなやあまらうれ味の美たうととを煮してこれ
 餅を煮あり高麻の粒を周乃世たう治り遊よ
 本卒と致へしとより治人し事とお傳く二月
 三りよ草餅を依り粗盤のよむ草餅のかさり乞
 たりとてまねりともん志るもは候たりなるか
 西と刀びこくおあまれかどりしとてはて奉
 刺くすしとさりやわ候た汁會乃候たりし
 信よりいしやあまれ候の信とてとてはてしとては

よのむ事月全産教は法天生とて引てんく二方地
 花とをく酒よひく一これとのめ病と除之教を
 ちうんゆひとちん地花と酒よ浸さひひとちの地と
 用个一ち茶乃花と服とれ鼻血りてくやまひと
 中茶よんてんてり

〇そろく一夫信部一考地先祖乃神皇代前乃時食
 とそろくむろ徳あり世國乃人とかぬ手乃一と事か
 たり信部と元りれ外上巳織午星夕中元室湯を
 乃能方うこれ世俗の貴すの財けてよめくうれ茶地
 時食とそく考教一宴樂は志るる考地先祖一すあ

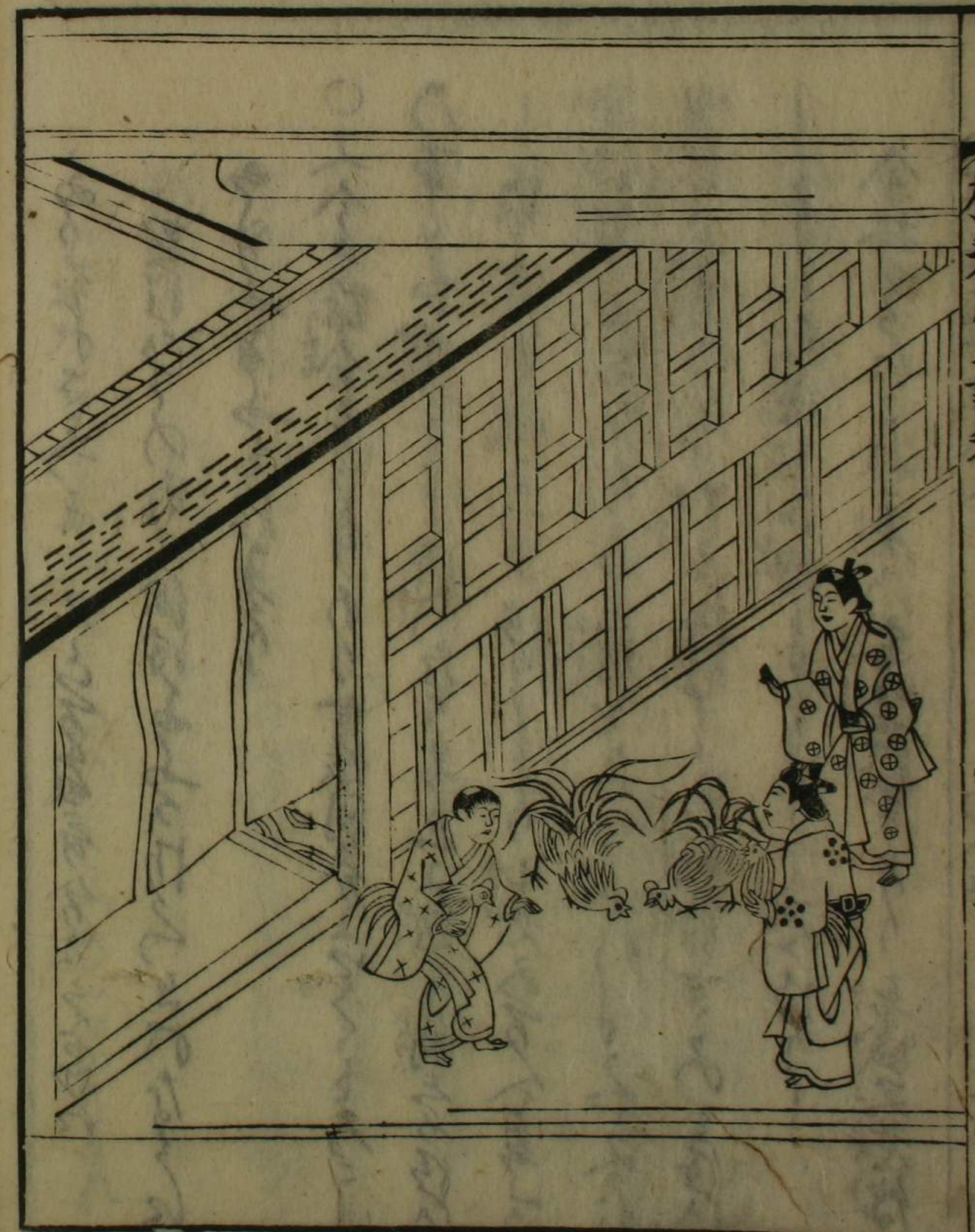
さゆいんよさうさようひ又堂あり車り車せうあ
 りましく亡に車りてあし車りてくもり乃さるん
 やあゆいんも財代果蔬もの教也時食くの上巳の
 草履地午乃粽中元乃蓮系飯市湯の菊酒菓子
 飯の教ありととと整よそりて盡るは飯之一一月
 初ま難煮とととむり終れく
 〇よめ一へい今日曲水乃宴とるの毛ハ川乃上と通運
 一後櫻志く流水と筋とうくろれ杯の酒茶と色
 ざりははよ精と能くそその杯と酒酒とうけく飲
 々心事あり酒筋と筋とをどらうもはひりあう一

後晉諸侯又々々々晉乃武帝尚書執虞又同々
 々々二日の曲水も義何とり拈や執虞對して
 漢代章帝乃時平系代徐肇二月初と云々
 乃女と云々二日よびて三人も小房一ぬ一村
 の人々々怪々々これと云々携拈々鹽洗
 一遂々流水も雲々々々これとのむゆは宴
 々々々起々々帝の云々は夜の云々々々々々
 何々何々尚書郎東哲云々々々々々々々
 小生云々々々々々々々々々周云々々々々
 邑々々々流々に因々危々々々々々々々

羽觴流波又秦代昭王二月と云々雲河の令々々
 々々向々出氷の刃と拈々々々々々令々判育
 及秦乃霸徳侯因此立為曲水昔漢後漢と云々
 お派々々々々帝乃々々善金々々々々
 東哲云々々々執虞と云々陽城乃令々々々
 々々々々々々東哲の言と云々一対の附合の
 何々々々々々又凡土紀云々後漢の鄭虞の事
 々々々々々々後漢書後漢志云々三月と云々
 益獲飲于流氷と云々々々漢代何々々々
 何々鄭虞と云々々々々々鄭乃國の俗

二月乙巳日蘭とありて宗と石律と被除とあり
 訪經代郵風より人々苦きみ清り活するも強強は
 仍れんる代姑久しよ事たり久し
蒲穎士楔飲序楔也
御也郵風者之蓋取法
勾萌者遠陽氣敷也握芳蘭臨清川乘和蠶溲用微不社其系深
矣汲之梓善令三月宴序云ハ酒食出于所曰楔飲也
 我朝ゆき水乃富とひらぐ事 弘宗天皇代
 御宗より始りりさうはきん家 國も曲あ
 乃家の初居るも人々も中世はたつち
 終業合編は日本三月三日有桃の花水宴とあり
 教後吉今よ定家は女あ妻乃奇り
 史くりりよまわや厚しひ乃もくあ名よたうれ

あり花代さうの月 又と方女身合よとあひ
 史くひのあひはあつちつとされなると
 ころよあをたまり
 ○又今日鎌合さうのあり世後同をよとくもろり
 乃事りや明の戸津門たもあまは難と關あは
 一にかたなく位よつち終りしり少見も百人とあふ
 治給坊と云ふとまきや難とりせしりしりや又あ
 明皇ハ乙酉の年生まはるる一は關勢とよめは
 一より東珠をみ傳くもあつて人たり
 今按るといれ唐乃云々其事たり 東城又老傳



村多房原言

ことし書よむより玉燭宝典より食乃常城市
 各雜と關一めく感くはさなり又清明代り諸
 とたろくし然てぬりも多しとすや侍りたよ
 とりた乃家宗の志事も清めの日代事なり
 かろ事しそ我 國子も日難合とるもあま
 關總代事も左傳より入えぬれいし下りまき
 ○は日艾と死徒と戸よさけ風ふりそ家一因て
 よしそ平金月今より又増年よきも下りあり
 ○今日めれわくみのぬりも事よひあかりそいそ
 らとれた人形とりてあそぶるなりむかひあそびの

事と源氏物語をくもてはゆれへあしそあり
 一よりあり又源氏より十よりありぬり人いひかれ
 ひいそもくろのそあそび十よりありそと家
 事なりそ又遠よりそと人形も衣振とぬり
 てそ世帯ちとせそこれとりてあそぶるなり
 源氏より方あまよりひけるなりそ
 他よりあり抄よまきのハ三葉もこれと月か
 此よりそこれと多し遠よりそとつれりなりそ
 晦日体活今日と三月共とよりそ春ハ湯餅乃時
 けりて天守融りよ昔もあそびも多し常陸國人の
 血氣を和暢とるなりぬれハ丸煮遊しそ
 〇六

へく次去とさうさふをまればはつる日をまど郊野
おろそひふ歩小宅隙して顔老と笑一春とさ
身一後撰集一久河内躬恒の奇

くれてさしおひくふたはまの目と花はまき
ふふきくさん玉葱集に三月先れんと大徳の
おもすうわさくてあろふ乃後とまて
くはつらん又お大徳云ふ意の弄
先くくゆんまははさくもあさくもまあ
まのららんも

賈島ク三月晦日贈劉評事詩

三月ハルカ晦クハ三十日ト風光フウカウ別致ベツチ苦吟クイン并ナラ君キミ今夜不
須ス晴ハル未マあ晴ハル後ノチは是コノ春ハル

清明三月より二日ニヒ前マヘ乃ノ日ヒと定定食食と云云い日日りりううくくふふ八八母
先先世世れれ墓墓所所と掃掃塗塗してままとたたははるるののゆゆととうう
これこれううくくくくくく乃乃風風俗俗ををららくく張張子子初初生生初初死死とといいくくまま
念念とと十十月月朔朔日日展展墓墓とと可可為為るる事事本本初初生生初初死死とといいくく
古古徳徳とと志志ををららくくいいげげ日日世世先先乃乃墓墓所所とといいくくまま
一一のの事事とといいくく

い月イ親シ戚シ及及交交友友とと會會すす一一元元寢寢とと會會すす事事カカをを臨臨
てて厚厚とと一一豊豊約約ととれれ可可にに南南とと一一主主人人乃乃とといいくくまま

害と老教して禁禁とこみひくは又舊譜に
 て禮と失くす又通とわくちかき人びら
 之礼と及るは世俗親戚男女と宴とる不替大
 と扱ぐ淫樂を強ひ人情と通ぐけ宣とまき
 致子孫の已して徳とまきぐんとなす平家
 徳徳樂をどくち介たりとまき

三月 壬午より日始しあま屋宅とまき他破換
 と修造し或茶屋と落改板屋と修葺とす

二月 治承五年の初孫と田舎暦も記す

一月 菜蔬花多き若菜も種し或は菊苗二月

初又ハ中旬よりえてぐらとるれハ何とそり
 南風蜀黍玉蜀黍若菜鳥芋紅豆黒豆菘菜豆腐
 豆志豆刀豆胡麻薑眉兒豆黍石竹地芝草麻子
 荊芥香蒿をいひ月乃菘のくど免う免き
 紅豆々三月の中より初種とす二月の菘も
 やりくうゆきいろれ菜のく久し地芝温たり西
 豆かよりうゆき一丸菜蔬とゆりふたり記す
 一とるれはちやまき菜のり屋は湯守菜のり
 りゆあり又その地動ハ急暖によりて運速のり
 り久し又い月本と扱し椀橘柑袖香梅乃影を

清明乃其後二持てうしと月令庶幾乃及なり
 日くさ蕨と九斗して所とくまやせ日ふかーふみそく
 かりう一庶と洗きて又日にけり收まてー食する付
 湯よひー一うらな月め或く蕨と用のをきき
 新書乃後より或垣淹りて筆一垣蕨ハ乾蕨
 まされりいんとなまぬ垣蕨ハ用やまら干蕨を
 野くまろく傷を用ひるー又蕨ハ狗脊ハ垣淹り
 元蕨のけりもハちま乃後七中二日と期とまらり一書
 蕨好く書一乃くゆると今世於郡乃ひとある樹を
 ままれ後六十日といく壁れ野す吉野ハ山中

たむとまま乃後六中二日といく花候とす年
 乃新蕨にりうと山下にりくまら一連連
 ろも大やうたがら良系那乃ハを樹をひそく
 樹二十日あまらりわら一奥とまら心の上ハ年
 一り花候とまらり一力事一旬二旬或一月也
 化和青ハ梅ハ法中よりやまきく樹るさ種ハ梅
 身仁和も乃けくちまらり記く
 此月小蒜及雜子と食く一又禽獸乃又臘と食
 事なりハ生蕨障麻肉と食く一と凍道とくハ
 瘡毒熱病と食ハ並とくハ根と食す
 月令庶幾乃及なり
 博多府志卷三

強^スク^シク^シ生^ルと殺^スと^ル多^クク^シて天^ノ道^ヲ示^スバ^クを
ち^クく^シ命^ヲと延^ス止^ル百^ノ草^ノの^ハ其^レ花^ヲ葉^ヲと^シ合^スル^ヲと
魚^ノ鱈^ノと^シ合^スル^ヲ化^スせ^レて^シ宿^ル疾^ヲを^シぬ^ク

三月乃古候才一桐始^ル新^ル才二回^ル鼠^ノ化^ル為^ル鴛^ノ才三^回始^ル
見^ル古^ノ清^ノ明^ノの^ハ二^候あり^テ才^ハ洋^ノ始^ル生^ル才^ハ鳴^ル鳩^ノ拂^ル
其^レ才^ハ六^載勝^ル降^ル于^テ桑^ノ才^ハ穀^ノ由^ル乃^ハ二^候あり

清^ノ明^ノハ^ハ五^刻又^ハ十二^刻十分^ノ夜^ノ四^刻十分^ノ七^刻十分^ノ殺^ス又^ハ
五^刻十分^ノ四^刻十分^ノ夜^ノ四^刻十分^ノ五^刻十分^ノ月^ノ余^ノ慶^ノ義^ノ

日本書紀時記卷之三畢

